西南学院大学　人間科学論集　第5巻　第2号　　119－134頁　2010年2月

自作を教材として用いる試み　2

黒　木　重　雄

An Attempt to Use my Own Works as a Teaching Material 2

Shigeo Kuroki

数年前から自分の制作を学生に公開している。ゼミの時間には、この一週間で上手くいったことや失敗したこと、ついでに次の作品の構想など、私の制作にまつわる諸々を話すように心掛けている。

さて、今回、本稿では、2008年9月の個展に出品した作品 7点を掲載した。いずれも構想から完成までを学生に公開してきた作品である。解説文で書いたようなことは、おおよそ学生に話したつもりだが、いまひとつ記憶が定かでない。ともあれ、作品の解説を文字で残すことは、自分自身の資料としても重要なので書き留めておくことにした。

書き留めながら思ったことがある。私が学生だった頃、先生の言葉はキラキラしていた。講評会での山本文彦先生の「絵には品というものが要るんだよ」だとか、学食での雑談中に聞いた河口龍夫先生の「ナンセンスって重要なんじゃないかな」だとか、上手く文字には起こせないけれど、数多くの先生に数多くの言葉を貰った。いずれも、若い私にとっては、後の制作の指標となるような金言だった。それに比べ、私の言葉はどうだろう。ちょうど、あの頃の先生方の年齢に近づいているにも関わらず、迷いやブレだらけだ。これは、とりもなおさず、作品制作に対する迷いやブレだ。実は、30年近く絵を描いていながら“何を描くか”“どう描くか”のいずれにも明確な答えを持ち合わせていないのだ。つまりは、日々移ろうおぼろげな答えを頼りに指導（？）に当たっているわけだ。前稿では、あたかも自信たっぷりに指導しているかのように書いてしまったが、しどろもどろなのが正直なところだ。私としては誠実に絵と向き合っているつもりなのだが、やっぱり、学生には頼りなく映ってしまっているのだろうか・・・。

そう！だからこそ、そんな理由もあって、自分の制作を学生に公開しようと考えたのだと思う。洗いざらいを曝け出して、中途半端に迷ったり、中途半端にブレたりしているんじゃなくて、真面目に迷って、真面目にブレているんだということを、伝えたいのだ。

1　決心

2007年、アクリル画、182.0×227.5㎝

20年近くも昔の話、チャールズ・バークリーというNBAのスーパースターがいた。バスケットに詳しい友人が「走る冷蔵庫って、よく言い当ててるよねー」って言った。巨大でずんぐりむっくりした体形をアメリカ人が冷蔵庫に例えたらしい。“走る冷蔵庫か・・・”その友人の言葉が印象的で記憶に残っていた。

この作品の前作『One Life』では、超極細の面相筆を手に8ミリのテントウムシを描いた。息を止めて画面にかじりついて描いた。ところが、ちょっと離れてしまえば細かいところなんか見えやしない。こんなことに意味があるのか・・・。きっとその反動だったのだろう、大胆なことがしたくなった。落書き。2メーターを超える白い大きなキャンバスに木炭とジェッソで、泣きながら家出する冷蔵庫を殴り描きした。あっ、思いがけず魅力的なイメージができた。ただし、10分そこそこで描いた代物、このままではとても人に見せられない。普通ならば、この上に描き込みを重ねて完成度を上げていくわけだが、そうすると、この新鮮さがどこかに飛んでいってしまう。なんとか新鮮さを繋ぎとめておく方法はないか・・・。そう言えば、前々から、同じようなジレンマに悩まされていた。以前にも、下描きの段階で魅力的なイメージを捉えたことがあった。で、通常通り、その上に描き足しながら完成を目指した。しかし、描き足すにつれてだんだんとつまらなくなっていった。そこで、もう一度、最初の新鮮なイメージに戻ろうとした。けれど、画面は変化してしまっていて、最初のイメージを二度と捉えることはできなかった。こんななんともやるせない経験を踏まえて、今回は、もう一枚同じ大きさのキャンバスを準備することにした。殴り描きのキャンバスの隣にもう一枚キャンバスを並べて、殴り描きには手を付けず、こっちで殴り描きを、観察→分解→再構築してはどうだろうと考えたわけだ。この方法だと新鮮なイメージは常に隣にあって、いつでも参考にできる。つまりは、鮮度の低下と完成度を天秤に掛けながら制作すれば良いわけだ。これはなかなか良いアイデアなのではなかろうか。しかし、この方法には、なんだか“逃げ”のような後ろめたさが付きまとった。絵の制作には、後戻りができない不可逆な現実があるからこそ緊張感が生まれ、制作者の感覚も研ぎ澄ませされていくのに、その魅力を放棄しているようなものだ。そして、もうひとつ、計画的に絵を描いてしまうがために、絵の中に偶然を取り込みにくいという欠点があった。以前、別稿で述べたが、絵画が魅力的であるためには偶然の取り込みが不可欠なのだ。というわけで、結局、この描き方はダメな絵の描き方という結論に至った。なのだが、そう解っていても後悔性

の私はそうしてしまう。絵の描き方を変えるためには、この性格から変えなければならないようだ。

2　別れ

2008年、アクリル画、182.0×227.5㎝

雨に濡れるテルテル坊主の絵を描いていた。そんな折、飼い猫が病気であることがわかった。治療を始めた。なんとか日々の注射で元気を保っていた。が、2007年8月31日深夜、突然、痙攣をおこした。動物救急病院に連れて行った。徹夜になった。点滴を打って落ち着いたが予断をゆるさない。翌日もほとんど寝ずに看病した。三日目、看病は家人に任せて学校に行った。休日だったが、仕事は仕事。もうろうとしながらも画面に向かった。予定していた通り、無数の線を引いた。線で表したのは雨。テルテル坊主の背景ができた。疲労して帰宅。家人と看病を交代。ほどなく、猫が再び痙攣した。9月2日夜、今度は救急病院に着く前に車の中で死んだ。9月3日午前、火葬。9月3日午後、学校に行った。テルテル坊主の絵はやめることにした。画面右の無数の雨を消した。その数日後、画面左の無数の雨も消した。そしてまた、その数日後、中央に残った無数の雨も消した。左右の雨空は白いカーテンに、真ん中の雨空は満天の星空にした。そんな満天の星空の下で、別れを悲しむ冷蔵庫と洗濯機を描いた。愛猫の死に苦しみながら筆を執り、翌年の1月2日にこの絵は完成した。鎮魂の絵。

3　星に願いを

2008年、アクリル画、72.7×41.0㎝

カッコいい芸術家は、人々を置き去りにしてどんどん先に行くものだ。だが、そんな芸術家はなかなかいない。ほとんどが「またこれ!?」と言われ、人々に置き去りにされていく。そう言えば、今回の個展は、会田誠の個展と会期が重なった。私にとって会田誠は、数少ないカッコいい芸術家のひとりだ。新作を見るたびに、置き去りにされていく感じがした。いつも“守らない”が貫かれていた。最高に難しいことだが見習いたいと思っている。

ある日こそこそと美術準備室で絵を描いていた。すると、学生が入ってきて絵を一瞥するなり「また、洗濯機描いてんのー！」と言った。「いやいや、ちょっと小さめの作品を描かなきゃいけなくて・・・これが最後」と苦し紛れの言い訳はしたものの、まさしく「またこれ!?」状態だ。日ごろから学生にも他人にも自分にも「変化しろ！」だの

「描いたことがないものを描け！」だの、偉そうなことを言ってるくせに、なんたる失態、恥ずかしい。しかも、更にその後も冷蔵庫や洗濯機を3回も繰り返し描いてしまった。こだわりなんかじゃない。楽な方に逃げたのだ。あー、ほんとに猛省。

4　オフィーリア

2008年、アクリル画、182.0×227.5㎝

今回の個展には次のような挨拶文を書いた。

≪10年間いつも一緒にいた猫が死んだ。ありきたりの言葉だが、心を引き裂かれるように悲しかった。猫一匹の死で大袈裟かもしれないが、生とは？死とは？幸せとは？と、何度も問い返した。後悔の底なし沼がそこかしこに口を開けた。その沼を覗き込まないようにしながら縁を歩く日々が半年続いた。そんな中で絵筆をとると、筆先から悲しみが漏れるような気がした。これまでに描いたことのない絵ができた。良し悪しはともあれ、絵の幅が拡がった。作品は『オフィーリア』と題することにした。ミレイの名作への憧れと、オフィーリアという音の美しさに魅かれて、そうした。

話は跳ぶが、日頃から、他の生き物に苦痛や死を強いる人間の傲慢さに辟易している。蛮行の数々、人間の非道ぶりは目に余る。だが、そんな人間にも、他の生き物と同じように、ただひとつの例外もなく、死が待っている。そう、生き物はすべて死ぬ。この絶対的な平等が私は好きだ。≫

10年前、ロンドンのテートギャラリーで、ミレイの『オフィーリア』をしげしげと見た。見たというより、釘づけになったと言ったほうがいい。近づいたり離れたり20分ほどは見ていたと思う。解ってもらえないかもしれないが、一枚の絵を20分間も見続けるのは、とても難しいことだ。実は、私は他人の絵を見るのが、33歳までは苦手だった。美術館に行っても殆ど立ち止まらず、メトロポリタン美術館だって1時間で見て回った。原因は驕りだ。そのころ私は孔版画をやっていて、自分の制作に自信も誇りもあった。この自信と誇りが、他人の作品が心に届こうとするのを邪魔していた。ところが、33歳半ばに自在に操れた孔版画ができない環境になった。慣れない筆と絵具で絵を描かなければならなくなった。自信も誇りも失った。これが、転機だった。武器だと信じ執着し続けてきたものを失った途端、ガチガチの外壁が崩れて、スカスカの中身が露わになった。守ってきた中身のなんとちっぽけだったことか！このことに気付いてからは、スカスカが欲するせいなのか、絵を見たり、話を聞いたり、文を読んだり、が心に届くようになった。

前置きが長くなったが、挨拶文に取り上げ、DM にもした『オフィーリア』と題したこの作品が、今回の個展で私が最も世に問いたいと思っていた作品だった。ところが、初っ端、展示の際の関係者の反応は鈍く、続く会期中の評判も低迷し、当然ながら、その後も問い合わせなどあろうはずもない。まさしく、作った側と観る側とのギャップを強く感じる結果となった。それじゃあ、この作品が嫌いになったかと言うと、そうではない。不評でもやっぱり気に入っている。たまに逆もある。気に入っていない作品が好評を博することがある。それじゃあ、その作品を好きになるかというと、やっぱりそうではない、気に入らないままである。当たり前のことを言ってるようだが、これは、重要なことだと思っている。なぜならば、作家自身が自作の良し悪しを決めなければ、次への展開は望めないからである。そして、なによりも、“なぜ絵を描くのか”という問いの答えがここには隠されているからである。その答えとして“自分の可能性の追求”などとカッコいいことを言ってる手前、ここだけはブレるわけにはいかないのだ。

5　問い

2008 年、アクリル画、182.0×227.5㎝

アメリカの現代作家エドワード・ルッシュが本の絵を描いている。大きな長方形のキャンバスに真正面から見据えた一冊の本、周りには少しばかりの影と、表紙の中央つまりは画面の中央には“Bible”といったような本のタイトルが描いてある。単純だ。がしかし、その単純なイメージは絶妙な余韻を宿している。例えば、ひとり佇む人物像を描いた絵や、あるいは雄大な大自然を描いた風景画だと、その絵の背後には文字では表現できないような深遠なる精神性や、視点を彷徨わせるのに充分な空間が封じ込められているものである。しかし、ルッシュが描いた本の絵の場合は、描かれた表紙の背後にあるものは、紙束の厚さ数センチの“深み”と、そこに記された文字が持つ若干の“含み”に過ぎない。このあっけらかんとしたユーモアが、絶妙な余韻だ。20 世紀、古からの考えに衝突した現代美術、流行ったのは、絵は平面でありそれ以上のものではないという考え。絵画が宿していた“深み”や“含み”は吹っ飛んだ。ちょうど、その衝突の終盤に画学生だった私は、少なからず両方の影響を受けた。「あっちは古いし、こっちは不毛だし・・・」で、落ち着いた先は、浅い“深み”と軽い“含み”だ。そのまさしく好例がこのルッシュの本の絵なのだ。

他の作家と同じモチーフを使うのは、あまり気分のいいものではない。特に、単なるモチーフの共有というだけではなく、そのモチーフが持つ特殊な“深み”　“含み”を

も共有する場合はなおさらのことだ。とはいえ、手垢の付いていないモチーフなんてものは、もはやこの世には皆無だ。したがって、描きたいものがカブることは避けられない。そう、私も、どうしても本の絵が描きたいと思っていたのだ。

前段とは何ら関係ないのだが、桜の花びらも描きたいと思っていた。よっぽどの貧乏性なのか、毎年、散った桜の花びらが地面をびっしりと覆い尽くしているのを見て、もったいないなぁと思っていた。何かに使えないのかなぁ、せめて、絵に描いておけば報われるのになぁと思っていた。しかし、桜を描いた名画は山ほどあって今更だし、散った花びらだけでは絵にする自信も無いし・・・。というわけで、こちらも延ばし延ばしになっていた。

さて、今となっては、どういうきっかけだったのか忘れてしまったが、2008年の4月、スケッチブック上でこの両者が、ほぼ同価の関係で合体した。水面を漂う無数の本に無数の花びらが降り積もる。降り積もった花びらは、本への注視をいい具合にはぐらかし、本の形態は、とりとめない花びらの群れにピリッと気の利いたリズムを与えた。これまで、二の足を踏んでいた二つのアイデアが一気に動き出した。画面の構成は、主題が画面一杯に拡散するタイプ。この手の絵は、思いのほか配置が難しい。大小たくさんの本を床いっぱいに広げて、ああでもないこうでもないと、なるべく偏りなく見えるように細心の注意を払って決めた。その後は、いつも通りの手探りの連続。終盤では、桜の花びらの止め時が計れず、ひとひら描いては下がって見、またひとひら描いては下がって見、を繰り返す毎日が続いた。結局、明確な止め時が判らないままに、少々モヤッとした気分のまま筆を置くことになった。そのせいもあってか、これまたいつも通りの感想“もっといい作品になるはずだったのに・・・”が残った。

余談だが、この絵の制作期間中に、自転車で転んで小指の骨を折るというハプニングあった。幸い左手だったので、良かったぁ絵は描ける、と思った。が、とんでもない誤解だった。実際には、右手だけではどうにもならないことばかりだし、そもそも、やる気そのものが萎えてしまい、まともに絵なんか描けたものじゃなかった。たかだか左手の小指の怪我なのに・・・ふと恩師に教わった言葉を思い出した。「絵描きに必要なのは、万全な身体と、少々不健康な精神だ」。

6　Happiness

2008年、アクリル画、72.7×60.6㎝

当初、『問い』で描いた沢山の本には、それぞれに題名を付ける予定だった。自分に

問うてみたい問いが、その題名だった。“death”“solitude”“despair”などなど。表紙の中央に一語、金（実際の絵具は黄土色）で記すつもりだった。がしかし、さすがに何十冊もあると、ごちゃごちゃとうるさく邪魔に思えてきたので題字は描かないことにした。描かなくて正解だった。ただ、ちょっと心残りなのは、他の題字はともあれ“happiness”という題字を描かなかったことだ。なので“happiness”一冊だけを取り出して、別の絵に仕立ててみることにした。それがこの絵である。

私は現在47歳。最近になってようやくいろんなことが少しずつ解ってきたように感じている。いろんなことが解ってくると迷いは減るのかと思いきや、予想に反して逆に段々と増えている。そんな迷いの中で、最大のものは“幸せとは”である。あまりにもストレートすぎて気恥ずかしくなるような問いだが、この問いに迷うことは大切だと思っている。

7　Angel Ring

2008年、アクリル画、227.5×182.0㎝

前作『オフィーリア』の画面上下の川岸は、いつもとは違う描き方で描いてみた。ぐちゃぐちゃに絵具を塗って、そのまた上から絵具を塗って、離れて見る。何も見えてこなければ、再び、ぐちゃぐちゃに絵具を塗ってみる。再び、離れて見る。今度は、絵具を垂らしてみる。離れて見る。ようやく、何かがぼんやりと見えてくる。真ん中に男の頭が・・・。じゃあ、ここは男の頭にしよう。端っこにはトカゲが現れる。じゃあ、端っこはトカゲにしよう。なんてことを繰り返してみた。新鮮で面白かった。

よし、もう一度、今度は画面左右で、ぐちゃぐちゃ作戦をやってみよう。こんな風にこの絵は始まった。ぐちゃぐちゃに絵具を塗っては、死んだ犬や魚を描き、また、ぐちゃぐちゃに絵具を塗っては、捨てられた座布団にぬいぐるみ、ばらばらの四肢にごろごろ頭部とありとあらゆるガラクタを約1カ月かけて描き切った。ちっとも面白くなかった。理由は新鮮じゃなかったからだ。しばらくは我慢して描いたところを眺めていたが、だんだん厭な気分になってきたので、悩んだ挙句、潰すことにした。左右のガラクタの澱みは、じたばた足掻いた果てに草の生い茂る土手にした。よかったと思っている。なぜなら、画面がすっきりして主題が明確になった。そして、なにより、“なぜ絵を描くのか”の答えを再確認できたからだ。作品を作るために絵を描くのではなくて、自分の可能性を広げるために絵を描くのだ。

最後に、黒い河に丸型蛍光灯をポツリポツリ浮かべた。この丸形蛍光灯、ユーモアと

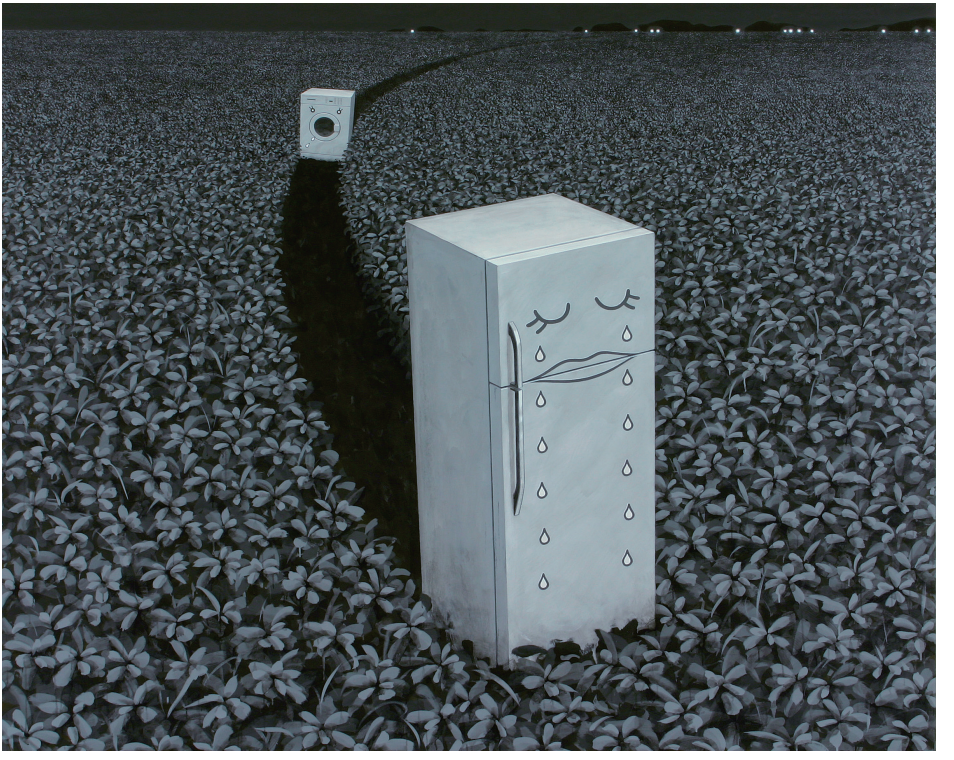
ナンセンスの度合いが絶妙で、私らしいモチーフだと思っている。

8　個展会場

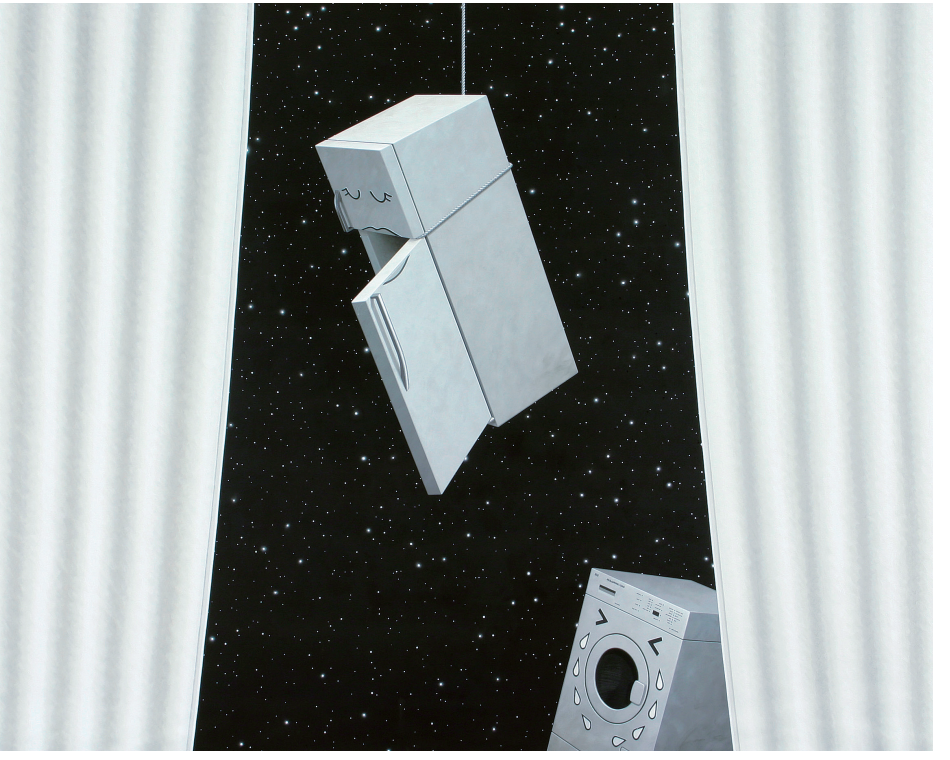
2008年9月13日～9月19日、ギャラリー山口（東京）

私の日々の言動や大学での授業の拠り所は作品にある。ここが魅力的でなければ、何を言おうが、何をしようが、説得力を持たない。個展は、その審査会だ。今回の個展では、前回の個展後からの１年半の仕事が魅力的かどうかを、世に、そして自分に、問うてみた。

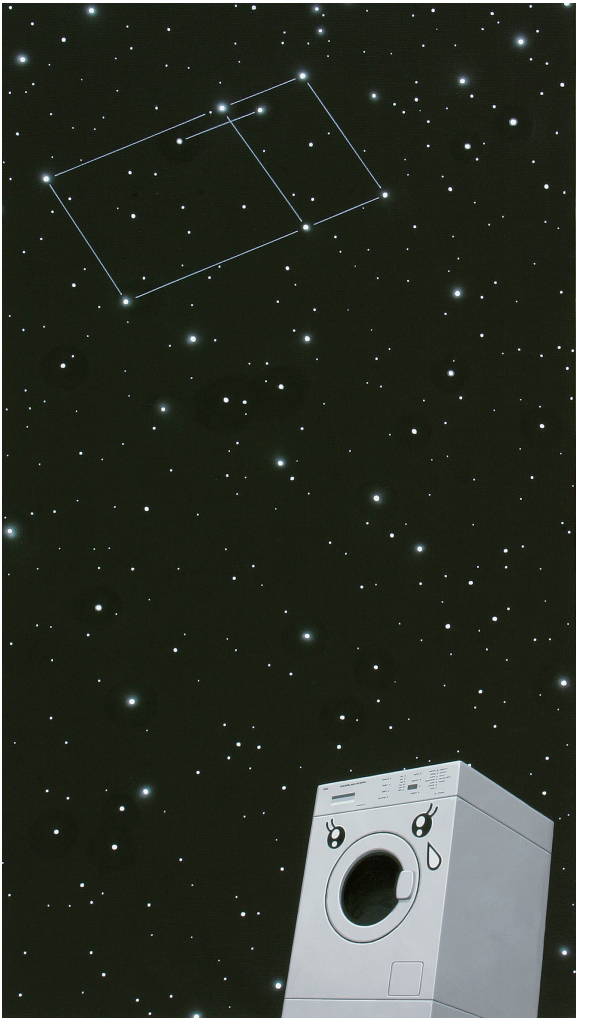
西南学院大学人間科学部児童教育学科



1　決心

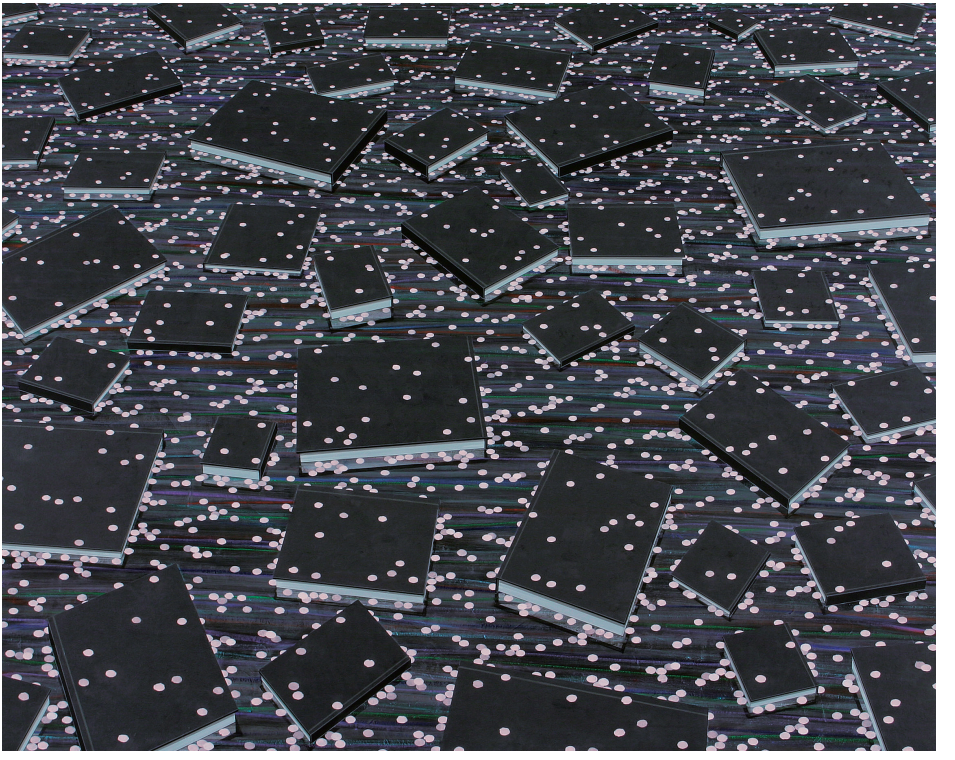


2　別れ

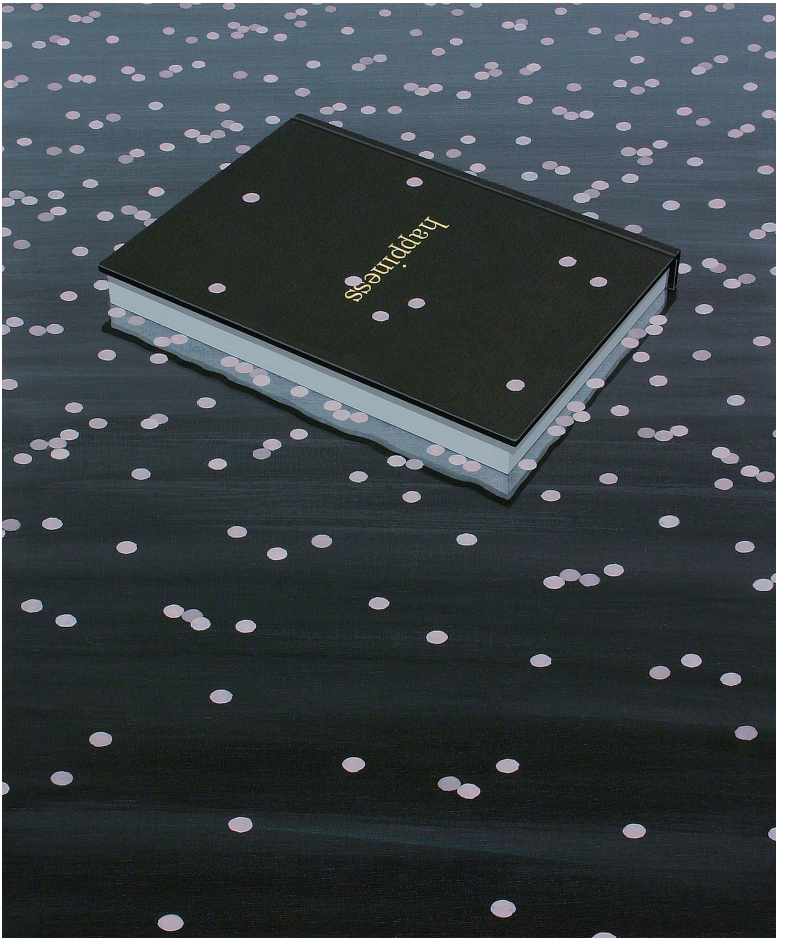


3　星に願いを

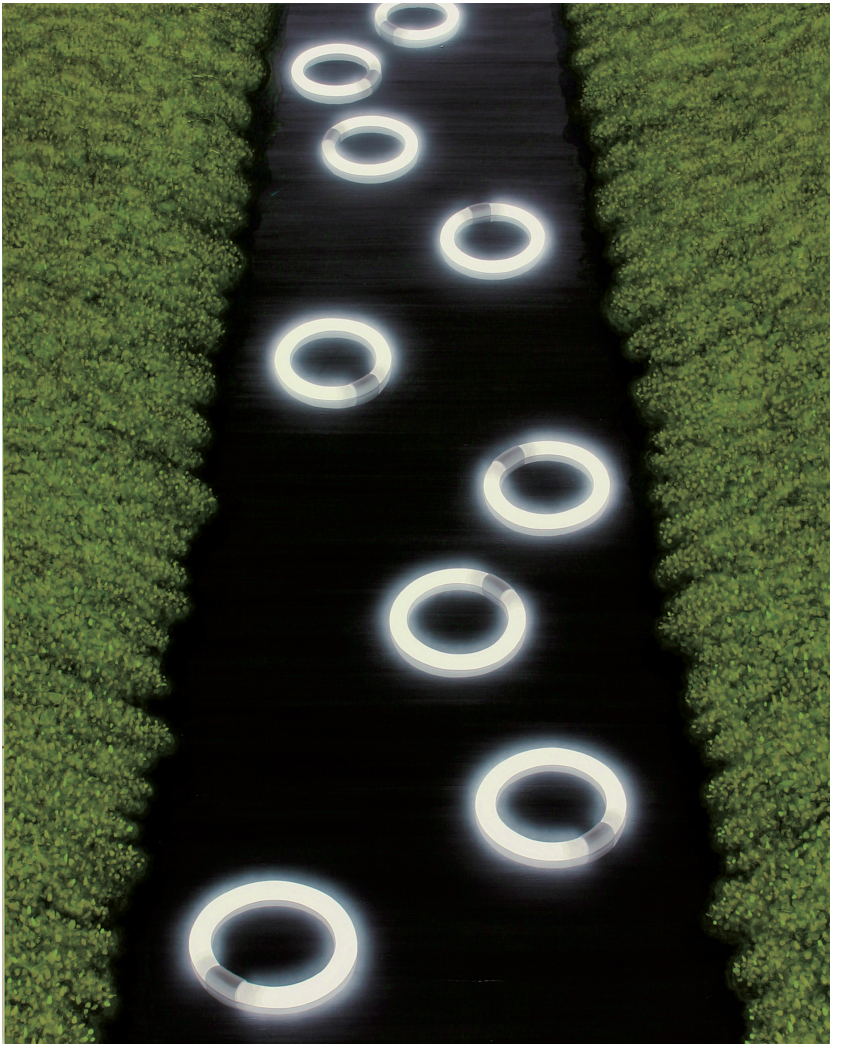
4　オフィーリア



5　問い



6 Happiness



7　Angel Ring

8　個展会場